

開催地名：北海道羽幌町	
開催日時	令和3年11月21日（木） 10:00～11:30
開催場所	羽幌町中央公民館
語り部	茨島隆 （青森県八戸市）
参加者	羽幌町職員、消防署職員、自主防災組織等関係機関、町内会 約70名
開催経緯	羽幌町では大規模災害は発生していないが、住民の災害に対する危機意識が低く、防災訓練の参加率が低迷している。自主防災組織の設置も思うように進まず、災害対応を経験していない職員（特に若年層）が増えていることから、東日本大震災の体験談、教訓や自助、共助、公助の役割、地域における共助、自主防災の大切さを語っていただくこととなった。
内容	<p>(1) 東日本大震災の被害状況</p> <p>東日本大震災では国内の最大震度は宮城県で震度7、私が被災した八戸市では最大震度5強を観測し、津波は最大6.2mの津波が観測された。震災の死者、行方不明者の数は10年経った今も増減しており、被害調査が終わっていないことが分かる。死者の大半は津波によるものであり、死者約2万人、負傷者約6000人の被害が出たが、一方で阪神淡路大震災では死者が約6000人に対して負傷者が4万人以上に上り、災害ごとに被害の特徴が違うことがわかる。</p> <p>八戸市では浸水をし、沿岸部を中心に多くの建物に被害が出た。津波は何度も押し寄せ、工場備品やコンテナの流出、タンカーが衝突し漁船が打ち上げられるなど水産業にも大きな被害を受けた。7名の死者行方不明者が出て、家屋や施設への被害も甚大なものとなった。避難所では防寒対策の毛布が足りなくなるなどの状況が発生したほか、食事の配給が足りないような場所もあり、非常時は自治体はその機能を失ってしまうことがわかる。</p> <p>(2) 命を守るための行動</p> <p>阪神淡路大震災では生き埋めから脱出した人の多くは自力での脱出や、家族・友人の救出によるものだったという。このことから、自助、共助、公助の三助による対策が災害の被害を軽減することがわかると思う。共助と同じくらい大切な概念として「近助」というものがあり、普段から声をかけあい地域の助け合いを進める関係性が重要である。地域防災力向上のためには自主防災組織の設立促進や活動に対する一層の支援が必要になる。八戸では震災以降、自主防災組織の設立が増え組織率は83.2%にまで増え</p>

	<p>ている。防災資機材の整備に対する助成も行われている。</p> <p>(3) 東日本大震災から得た教訓</p> <p>「津波てんでんこ」という古くからの教えがある。家族バラバラでもいいのでまずは逃げて自身の命を守ること。災害に対する正しい恐れを持ち、どう行動につなげるかを考えるのが大事である。震災時は自治体職員が多く被災し、行政機能がマヒしていた。防災マニュアルを作成したとしても想定外のことは起きるため、自身で事前に対策をするのが重要である。例えば災害時に携帯通信は使えなくなる可能性があるが、災害用の防災無線171を事前に体験しておけば非常時にすぐ使うことができる。避難所に行ったとしても毛布や食料がないかもしれないため、事前の準備は非常に大切である。また自治体の避難指示に従って避難をしてほしいが、自治体からの連絡が遅れることも想定し自ら危険を察知する能力を高めてほしい。津波浸水想定などのハザードマップを自宅や勤務先におき、災害時にはそれを見て判断してほしい。就寝中の地震発生に備えてスリッパを枕元におきガラスや食器の破片によるケガをしないような対策も有効であるほか、車の運転中に被災した場合は慌てずゆっくり道路の脇に車を止め、徒歩での移動が適切である。</p> <p>津波は何度も繰り返し襲ってくる。第二波や第三波の方が大きい場合もあり、河川をつたい50キロも遡ってきた津波もあるので注意してほしい。避難時の注意点である基本行動、非常時の持ち出し品の準備を普段から意識していただきたい。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
開催地より	<p>災害発生時には落ち着いて行動をすると共に、自分の命を自分で守る努力をしなければならないと強く感じた。そのような災害時の行動指針として、防災マニュアルが欲しいと感じた。</p>